文化部活動の地域移行に関する検討会議（第１回）

■日時　　2022 年 2 月 16 日（水）10:00～12:00
■場所　　霞ヶ関ナレッジスクエア（霞ヶ関コモンゲート３F）

■議事録

議題（1）座長の選出及び座長代理の指名について
　事務局の推薦に基づき、検討会議として以下の者が座長に選任された。
　北山敦康 静岡大学名誉教授
また、会長の指名により以下の者が座長代理に選任された。
　齊藤忠彦 信州大学教育学部 教授

議題（2）文化部活動の地域移行に関する検討会議運営規則について
　原案の通り、文化部活動の地域移行に関する検討会議運営規則が決定された。

（北山座長）
　座長に就任いたしました北山でございます。何卒よろしくお願いいたします。
　私自身、中学校・高等学校と吹奏楽部の活動に参加しておりましたので、教員の働き方改革を巡って様々な報道に接する中で、学校の部活動のあり方に関しては重大な問題意識を持っております。
　この会議の委員をお引き受けいたします時に前もって送っていただいた資料を見させて頂き、また私も WEB ページ等で様々な資料を検索して勉強してまいりましたが、この文化部活動の地域移行に関する検討会議は、これからの学校教育・地域の文化、そして何よりも子供たちの学びの環境を整備する上で、社会から期待されるものが極めて大きいのではないかと実感しております。本日はこの検討会議の第一回目でございますが、これからここにいらっしゃる各方面での経験豊かな委員の皆様とともに、令和５年度以降の休日の文化部活動の段階的な地域への移行を着実に実施するための具体的な話し合いを進めていきたいと考えております。座長として何かと行き届かない点もあるかも知れませんが、どうぞよろしくお願い致します。
それでは座長代理の齊藤委員からもよろしければ一言御挨拶をお願いします。

（齊藤座長代理）
初めまして信州大学の齋藤と申します。座長に何かないことを祈りつつお支えできるようにして参りたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

（北山座長）
　それでは、文化部活動の地域移行に関する検討会議の開催にあたりまして、都倉文化庁長官より一言ご挨拶を頂きたいと思います。よろしくお願い致します。

（都倉長官）
皆さん、おはようございます。文化庁の都倉でございます。文化部活動の地域移行に関する検討会議、今日は初回ということで一言ご挨拶をさせて頂きたいと思います。部活動と申しますと我々の子供の頃から思い返しても学校の授業に勝るとも劣らず楽しい思い出がたくさんございますし、いまだにそういうことを思い出す機会があるわけでございますが、昨今は少子化をはじめとする様々な理由によってこの部活動がままならないという地域によってはその存続を危ぶむようなところもあるように聞いております。
また、部活の指導に携わる教師の皆さんの中にはその活動の内容にあまり精通していないという、そういうこともあるように聞いておりますし、またその教師側から見ましても長時間労働の要因になっているというようなことで、生徒にとりましても教師にとりましてもあまり望ましくない環境が今あるというふうなことで、抜本的に改革に取り組まなくてはならない時に来ているというふうに思っております。
文部科学省では令和 2 年 9 月に学校の働き方改革を踏まえた部活動改革というのを取りまとめました。改革の第一歩として休日の部活動の地域移行を令和 5 年度から段階的に実施していくということとなっております。
しかし、何よりも大切なのはやはり子どもたちが過ごしやすい環境で、楽しく部活動を実施できるということ、その環境づくりというものが大切であるわけでありまして、先生方のご見識ご経験をもとに闊達な議論をしていただければというふうに願っております。本日は本当にお忙しい中ご参集いただきましてありがとうございました。以上であります。

（北山座長）
ありがとうございました。改めて委員の皆様のご協力のもとで円滑な議論を進めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いします。
都倉文化庁長官はご公務の関係でこれにてご退席されます。どうもありがとうございました。

（都倉長官）
ありがとうございました。よろしくお願いいたします。

（北山座長）
それでは次の議事に移らせていただきます。
議事 3 検討項目　検討スケジュールについて、議事 4　文化部活動改革の目的・目標ですが、これに関しましてできるだけ多くの委員の皆様からご意見をいただきたいと思っております。お手元の資料 2.3.4.5 は事務局のほうから資料の説明をまとめて行なっていただきますので、その議題について各委員から後程ご意見を頂戴できればと思っております。また、文化庁において昨年度地域文化倶楽部の創設に向けた調査研究、お手元の資料にもあるかと思いますが、その中でも地域移行における課題が整理されておりますので、そのご紹介も併せてお願いただければと思います。それでは、まずご質問いただく前に事務局よりご説明をお願い致します。

（事務局）
少々お時間をいただきまして資料のご説明をさせていただきます。
　まず資料の２でございます。地域移行のこれまでの経緯ということで簡単にまとめさせていただいております。平成 31 年の中教審の学校における働き方改革の答申におきまして部活動は必ずしも教員が担う必要がないということとされており部活動を学校単位から地域単位に学校以外が担うことを進めるということになりました。それから令和元年の教育職員の給与等に関する法律の改正の附帯決議におきまして、部活動を学校以外の主体が担うことについて検討を行い早期に実現することということが附帯決議として出ております。
それから令和 2 年の先ほど長官からお話ございました学校の働き方改革を踏まえた部活動の改革についてという通知で、実践研究を実施し令和 5 年度以降休日の部活動の段階的な地域移行を図るということとされておりまして、今年度それから来年度委託調査実践研究を各地域で行っている、またを行っていただく予定になっておるところでございます。
　続きまして資料 3 を御覧ください。検討事項案ということで、事務局で提案をさせていただきます。本会議におけまして検討していただく事項につきまして 10 ほど提示しております。その前提で 0 ということでその大前提ということでございますが、ここの議論は文化部活動でございますが別途スポーツ庁におきまして既に 10 月から運動部活動につきましての地域移行について検討がなされております。既に 3 回開催されております。当然関係省庁が別といっても、学校現場では部活動は基本的に同じものでございますので、ある程度スポーツ庁と方向性を一にして議論を進めたいというふうに考えておるところでございます。
そういったことでこの資料につきましてはスポーツ庁の検討事項に沿って、文化部活動固有の課題がある項目を洗い出すような形で資料を作っております。それから後ほど簡単にご説明いたしますが、調査研究を昨年度行いましたのでそれについても参照していただければと思います。
　まず資料 3-1 番目でございます。文化部活動の目的目標です。先ほど長官からのご挨拶にもございましたが、学校の働き方改革のもとに対応のもと中学生はじめとする青少年にとってふさわしい文化芸術に親しむ環境を実現するということが大事であるというふうに考えております。また地域における文化芸術振興の観点からどのような効果が期待できるかということであるかと思います。文化芸術に親しむ環境はスポーツとは相違点がございますので、そこの矢印に書いてございますように地域における文化芸術に親しむ環境の整備が論点になるというふうに考えておるところでございます。
　資料を開いて 2 番目でございます。地域移行する前の文化部活動のあり方です。現在の文化部活動の課題を踏まえどのように改革していくのか、また学校の働き方改革に対応するとともに適切な指導体制を整えるため文化部活動の指導や引率体制をどのようにしていくのか、また指導を望まない教員の方が従事する必要のない体制をどういうふうに整備していくのか、この辺り基本的にはスポーツと運動部と共通の認識をもちつつ固有の課題を検討するのではないかというふうに思っております。
　3 番目でございます。地域移行のあり方です。地域や学校によって様々な状況が異なります。そのような中でどの地域においても着実に文化部活動を進めるためにどのような方策、さまざまな工夫などが考えられるのか、また移行した際に例えば地域での参加者、内容、種目そういったものがどうあるべきなのか。また地域移行の達成時期について、いつを目標にするのが適当なのか、このあたりをスポーツとはある程度共通の中で進めていくべきところもあれば、また個別の検討が必要なところもあるのではないか

というふうに考えておるところでございます。

4番目でございますが、文化部活動の地域での受け皿という点でございます。まさにこれは最大の課題といたしまして受け皿の整備が必要になってまいります。都市部や地方部では当然状況が異なりますし、また生徒のニーズも多様となってきております。どのような組織団体が受け皿となると考えられるのか、またそれらの組織、団体が安定的、継続的に運営できるためにはどうすればいいのか、また引き続きやはり市町村の文化振興担当や受け皿の組織、団体や学校が緊密に連携していくためにはどういった方策が考えられるか、財政支援の在り方としてどういうものが考えられるのかというところが論点になるかと思います。スポーツと文化では状況が異なるので個別の検討が必要になるというふうに考えております。

次のページをご覧下さい。5番目として指導者ということでございます。地域において指導する人材を確保するということは大切な課題であるというふうに考えております。どのような人材が考えられるか、そしてどうやって確保育成していく、またそれらの人材についての質の保障、そういったことにつきまして議論したいと存じます。専門知識がそれぞれ異なるので個別の課題になりますが、教育者としての資質や兼職兼業の仕組みについてはスポーツと共通のことが課題になるかというふうに考えております。

6番目でございます。施設です。文化芸術に親しむ活動を実施する場はどのように確保していくのかと、それからそれらの施設を円滑に使用するためにどういった調整連携のあり方があるのかといったことにつきまして議論をお願いしたいと思っております。施設はスポーツと状況が全く異なるので個別の検討が必要になるかと思います。

7番目、大会でございます。地域における文化芸術に親しむ参加者の成果発表の場や、またその実力を競い合う場としてどういう大会のあり方がふさわしいのか、またその運営スタッフをどのように確保していくのか既存の全国大会等につきましてどのようなあり方が相応しいのかということにつきまして議論していただきたいと思います。

共通の課題のもと個別の検討が必要になるのではないかというふうに思っております。

8番目が会費でございます。地域移行後、組織団体におきまして適正な額の会費を保証するためにはどのような方策が考えられるか、また経済的に困窮する家庭の生徒に支援としてどのような方策が考えられるのかでございます。

次のページ 9 番目、保険でございます。地域の文化芸術に親しむ活動に参加できるように保障内容や保険料等についてどのようなものがいいのか、また加入の義務付けの可否などについての議論です。これはスポーツと共有の課題問題だというふうに考えております。

10 番目最後ですが関係諸制度の見直しということで現在、文化部活動につきましては学習指導要領の総則に規定があるわけでございますが、そのような総則や入試等々における位置づけにつきましてどのように見直しをしていくのかというあたりをご検討していただければと思います。

以上、資料3 全体として今後検討していただきたいことを案として整理をしております。

資料４　に移ります。資料４は検討スケジュールということでございます。本日第 1 回開催いたしまして、できれば今後 1～2 ヵ月に 1 回のペースで会議を開催いたしまして、先ほどご説明いたしました検討項目について検討を進めていただきまして 7 月を目途に提言の提出をお願いしたいというふうに考えております。

それでは資料５に移ります。先ほど資料 3 でご説明いたしました検討事項の 1 番目、文化部活動改革の目的目標ということでございます。先ほどご説明いたしましたが大きく二つあるかと思います。ひと

つは中学校等の生徒の文化芸術に親しむ環境の改善ということです。働き方改革に対応するとともに中学校などの生徒をはじめとする青少年にとってふさわしい文化芸術環境に親しむ環境を実現するということが目的かと考えております。単に今ある文化部の実施主体を学校から地域に移行するということだけではなく、生徒によってふさわしい環境にしていくということが必要であるというふうに考えております。3つ目あたりから令和２年度の文化に関する世論調査のことを記載しております。その中で文化芸術の子供の直接の鑑賞の経験というのは40.6%というふうになっております。文化芸術に親しむ機会の充実の方策として文化芸術の鑑賞、体験をさらに充実させるということが考えられるわけでございますが、そういったことがさまざまな世代の、中学を卒業して高校、大学そして社会人、そういった世代が文化芸術に親しむ環境につながっていくのではないかというふうに考えております。学校の体験その他どのような関係が必要なのかご議論をいただければと思います。

2 ページ目でございますけれども 2 つ目として地域において文化芸術を親しむ環境の進行ということでございます。指導を担う団体は、文化芸術団体や大学の教育機関、音楽家や美術など、また地方公共団体で行う文化教室などが考えられるのでございますが、これらの調査研究、先ほど言いました調査研究によりますといろいろ地域ではやっているパーセンテージは高いのですが、それが児童生徒を対象としているという割合があまり高くないといったような状況が見えるようでございます。これらの状況を踏まえまして中学校等の生徒や地域住民全体にとってより良い環境の整備の両立という観点からどのような文化芸術に親しむ環境を目指すのか、また地域移行することによって期待できる効果としてどのような点が挙げられるのかについてご議論をいただければというふうに思っております。

資料 5 は参考の資料といたしまして文化芸術基本法や基本計画、学習指導要領の記載などが添付されております。最後でございますけれども机上配布資料の地域文化倶楽部（仮称）の創設に向けた調査研究というのを実施しております。 報告書につきましては２００ページ近いものでございます。その概要版はその次の報告書概要版というのをつけておりますが、この報告書の調査研究の中で、6 ページ目に委員名簿がございます。本会議の何人かの委員にもご参加いただいておるところでございます。前半はアンケート等の状況でございます。その中で 116 ページ以降に文化部活動の地域移行における課題が整理されておるところでございます。そこにつきまして簡単に項目だけご報告をさせていただきたいと思います。

116 ページ　5-1 におきまして部活動の意義と部活動の地域移行の関係性　（１）としまして文化部活動の教育的意義への対応方針、（２）としまして段階的な地域移行の在り方、（３）として地域単位での部活動への教員の関与について課題そしてそれを踏まえた提言をいただいておるところでございます。それから 5-2 でございますが 119 ページになりますけれども、学校、社会教育、教育委員会や社会教育施設等の役割分担の検討というものでございます。（１）としまして学校、教育委員会行政等の役割分担、それから（２）として学校の責任の範囲について課題や提言が記載されております。それから 121 ページ 5-3 でございますが人材、確保の育成の方針です。（１）といたしまして指導者・管理監督者における外部人材の活用、（２）地域と学校をつなぐ新たな人材の必要性、（３）人材の育成・確保、活用の仕組みについて課題や提言をいただいているところでございます。

続きまして 123 ページに　5-4 安全・責任体制の構築ということで、（１）地域移行の多様なケースを想定した安全・責任体制の検討についての課題や提言が記載されております。それから 124 ページ　5-5 教員及び子供の部活動負担軽減、（１）行政、地域、保護者等が果たす役割の明確化、それから（２）と

して子供の部活動の取組への頻度・時間等の考え方の明示と現状把握ということが書かれております。続きまして 5-7　127 ページでございますが活動経費の負担のあり方、確保の方策について課題や提言が書かれております。
それから 5-8 でございます。128 ページです。学校施設の整備の解放の方針ということで、（１）規則等にのっとった学校施設開放事業の実施、趣旨、（２）学校施設開放事業の運営体制、（３）対象となる利用者、（４）対象となる学校施設・日時、（５）用具及び備品の使用管理、（６）施設使用料の負担、（７）利用時における施設管理、安全管理についての課題や提言がなされておるところでございます。
それから 5-9、131 ページでございます。ICT の活用についてです。（１）ICT 活用が有効な局面、それから（２）ICT 活用に向けた環境整備について提言、課題が書かれておるところでございます。最後に 6 としまして 133 ページでございますが、国の支援のあり方について課題や提言が数ページに渡ってなされております。項目だけで申し訳ございませんが、資料の説明は以上でございます。

（北山座長）
ありがとうございました。それでは、ただ今お話し頂きました事務局からのご説明を踏まえて、委員の皆様からご意見を頂戴できればと思います。時間の限りもありますが、今日は第 1 回ということもございますので、大変恐縮ですが自己紹介も含めて、各委員の皆様からお一人 3 分程度でご発言いただければというふうに思っております。ご発言のご準備がよろしいようでしたら順に挙手をしていただいても結構ですし、Web でご参加の委員につきましては挙手ボタンを押していただく形でも結構ですが、もしよろしかったら、先ほどご説明いただいた最後のページに 50 音順に委員のお名前等が書かれたものがございますので、もしご依存なければ 50 音順で石津谷委員からお願いしてもよろしいでしょうか。

（石津谷委員）
はい。皆さんお早うございます。全日本吹奏楽連盟理事長の石津谷でございます。この度、委員を仰せつかりましたので、とにかく良い方向へ進むように尽力していかなければならないなと思って本日参りました。我々連盟としましても、この令和５年からの問題に関しましては連盟理事会内部、もしくは下部の連盟でもだいぶ問題になっておりまして、その話はそれぞれにしているところです。この問題は令和５年から徐々にというお話なのですが、現場の声を聞きますとこれがなかなか現状としては非常に厳しい状況であるということを聞き及んでおります。例えば、この問題を考えていく上で、その下地というのでしょうか、土台作りが非常に重要であると思いますが、多くの自治体では、今はとてもじゃないけどそちらまで手が回らない。コロナ対策で手一杯みたいなところが多いようです。実質問題として令和５年から取り掛かるということがどの自治体さんでも厳しいのではないかと。やはり連盟として考えていることは、一つ一つそのための準備を重ねた上で良い方向へもっていかなければならないと思いますので、あまり性急に行って、それが途中で崩れてしまうことがないようにしなければならないと考えています。この会議には多方面でのスペシャリストの先生方がご参加ですので、先生方のご意見を聞かせていただいて、吹奏楽連盟としてはその流れに沿った上で、尚且つもっといろいろな方策があるのではないかと視野を広げた上で頑張っていきたいなと思っております。さて私自身勉強不足で申し訳ないのですが、今後話し合いに参加していく上で一つ確認をさせてください。今から取り組む地域移行というのは、欧

米型を目指していくということでしょうか？いわゆる欧米型というのは学校内で部活なんてありえないですよね。学校終了後、体操とか水泳とか子供がやりたいクラブに保護者の方が送迎して好きなことをやらせる。学校ではいわゆる学習以外はやらないみたいなスタイルだと聞いていたのですけれど、この型を目指していくのでしょうか？それとも日本独自の部活とそういう土日の地域活動を上手く融合して作っていくという日本型のスタイルを目指していくのでしょうか？これについて文化庁としてはどのようにお考えなのかお聞かせいただければ、今後よりいろいろなアイディア等も浮かんでくると思うのですがいかがでしょうか？すみません、最初から質問をしてしまいまして。

（北山座長）
ありがとうございます。ではご質問については事務局のほうからよろしいですか。

（事務局）
ご質問有難うございます。部活動は多分海外では、ある意味「ない」、ほとんどないような状況でまさに日本の歴史でこう発展してきた歴史があるかというふうに思っております。あくまでこれの目標につきましては従来からご説明をしております通り先生方の働き方改革、それから子どもたちの部活動の関係の整備、もちろんその部活動に入りたくて入る子どもたちもいらっしゃいますし、またはその部活動ではちょっとどうかなという方がまた地域のそういう文化芸術活動に参加できるような環境、そういったことも含めて、学校の先生も子ども達も良い環境を作れるようなことを一応目指しておるというところを考えれば、日本型の新たなものというふうに言えるのではないかというふうに考えております。

（北山座長）
ありがとうございます。日本型の新たな文化部活動のモデルを作るという形で事務局が動いているというご説明をいただきました。五十音順に自己紹介を兼ねてご質問いただいておりますので、恐れ入ります。次は大坪委員お願いいたします。

（大坪委員）
はい。武蔵野美術大学で美術教育を担当しております大坪でございます。この地域移行に関する検討会議の前からこの問題に関わらせていただいておりまして、議論を聞き、参加させていただいている中でやはり私が教員養成を担当しているという立場からしますと、第一には現在の特に中学校の先生方の過重な労働負担、これを早く解消したいと考えております。そうしなければ今回文部科学省から出ている新しい学習指導要領で資質能力の育成が示めされておりますけれど、これはやはり相当な先生方の専門性が、教科の中の専門性が生かされないと実行できないというふうに考えております。片方で現場の先生方とお話をしていると「やはり中学生は部活動があるから中学校に行きたいのだよ」とおっしゃるわけです。それはやはり本末転倒で、「今日あの音楽の授業があるから学校に行きたい」、「今日はこの美術の授業があるから学校に行きたい」と生徒が思うような学校経営をしていくべきではないか。しかしながら歴史を振り返って日本の明治期に新しい学校制度が発展していくなかで、その中で生まれてきた部活動が文化振興に果たした役割は絶大であり、普及活動という点では学校の部活動というのが大きな役割を果たしています。ただ文化は発展していきますし時代とともに変化していきます。そうなってくる

とやはり先生が授業をやりながら、言い方悪いですけど片手間的に指導していくような段階から、既に変わってきていると言えます。さらにこれから日本全体の文化を発展させていくという視点に立った場合に、新たな文化に触れる、あるいは子供たちが単なる文化消費者になるのではなく文化の発信者になるように育っていくという環境を考えますと、新しいまさしく先ほどの話のように、日本型の文化振興の場というのが必要になってくるというふうに考えております。私も中学や高校で教員をやった経験がございますけども、この問題を考える原点になっておりますのは、運動部の方なのですけど私が最初に勤めました中学校で非常に熱心に運動部の指導なさっている先生があって、その先生に「すごいですね。先生は関東大会だとか都大会とか常連校ですごいですね。私なんか授業の準備でもうとても手は回りません。」と言ったらその先生が「僕の授業研究は職員室から教室に行く間に」とおっしゃったのですね。これはやはり僕はいかんと思ったのが私が最初に部活動問題を考えるきっかけでございます。ぜひこれから、子供たちが文化の主体者になっていくような場を探していきたいと。おそらく地域によって相当差があるし、特にその人材育成については、僕は重要だと思っているのですけれど難しいと思います。これから是非委員の皆さま方のご意見を拝聴しながら、ともに考えていきたいと思います。よろしくお願い致します。

（北山座長）
ありがとうございました。今後の議論の方向性が見えるご意見いただいたというふうに思っております。ありがとうございます。それでは順番にお願いいたします。次は金田委員ですが、金田委員はご都合で退出されたということですので、その次は名簿では私ですが、私はあとで皆様のご意見を踏まえてお話しさせていただきたいと思いますので、恐れ入ります、熊谷委員お願いできますでしょうか。

（熊谷委員）
全国高等学校文化連盟略して高文連と呼んでいます事務局長の熊谷と申します。高校の教員を定年で退職して今の役を引き受けています。よろしくお願いします。変な哲学を語るようですけど、私は文化っていうのは違いがあるということなのだと思います。学校の先生というのは「お前の服装、なんだ」とか「お前の考え方おかしいぞ」って言うのですけど、他の人と同じということを個性とは呼ばないと思います。私は個性を大事にしたいので人と違っているということを文化として認めたいと思います。教育というのは格差を嫌いますので、都会でも田舎でも一人の生徒に同じような学びとか体験をさせたいと思うのですが、無理です。どんどん統廃合で学校が消えていく中で、そこで文化を支える地域人材を期待するというのは無理だと思います。だから一律にみんなが満足する仕組みを創りあげよう。しかも拙速に取り組んで切り替え時期に割を食うかわいそうな子供が出ないように丁寧にやろう。ごめんなさい、これ違うのです。丁寧にやろうとするといつまでたっても取り掛かれません。絶対人が死なない車を作ってから市場に出そうと思っていると駄目で、ある程度安全性を確保した状態で市場に出して、そこでいろいろなトラブルやクレームを聞きながらリコールしたりしながら開発を進めて、何とか良くしていくというのが現実的な方法だと思います。結論からいうと全ての人を満足させようとすると誰一人として満足させられない、どの地域にもぴったりとこない、そういう仕組みになってしまうので、ちょっとした失敗を恐れずにまず令和５年のスケジュールにとりかかってみるということをなんとか守るという心構えでやるのがいいと思います。

以上です。熊谷です。

（北山座長）
ありがとうございました。高文連の活動におきましては、私も静岡におりまして、様々な学校の活動あるいは全国の高文祭等も見させていただいて、それぞれの地域に応じた活動を展開されて大変素晴らしいと思っております。おっしゃるようにその地域、そしてそれぞれの子供の大切さというものを十分考慮しながら、この令和５年度以降の方針にご意見いただければと思っております。よろしくお願いいたします。それでは 50 音順でいきますと、次に斎藤勇委員お願いいたします。

（齊藤勇委員）
はい。私は静岡県の掛川市を拠点に地域部活動をずっと、今 4 年目になりますけれども実践しておりながら、かつ地域部活動のあり方を全国にいかに展開できるかということを取り組む NPO 法人を今年設立しまして、その NPO 法人の日本地域部活動文化部推進本部という団体の代表を務めております。本日からよろしくお願い致します。私、この地域部活動文化系の地域部活動ということで学校の教育学習指導要領とか学校の教育と一体となってやるという形で地域部活動を、これおそらくいろいろな皆様がお調べになりましたが、日本ではおそらく初めて行ってきているとうかがっております。そういう中で 2018 年から今年 4 年目になって、いま最初の 1 期生中学生はもう高校 1 年生になっておりまして、そういうふうにして進めてまいりました。そういう中で私は 2018 年度もあの文化部活動のガイドラインの総合的なガイドラインの検討会議の方にも委員で出席させていただいたのですけれども、その頃はまだ将来的に地域移行を検討するというくらいのニュアンスだったのが急速に進展しておりまして、今やもう地域移行ということが前面に出てくるような時代になっているも大変驚いております。そういう中で、今学校の部活動を地域にと考えたときに私が実際にやって地域で、この部活動 4 年目になっていますが、やって分かることは、これは学校の部活動の今の数のすべてをそのままの規模で地域にというのは、これは恐らくほぼ難しいのではないかと考えられます。なぜか、という理由がありまして、地域に出た途端に人と物、つまり人材あと物の中には会場みたいな環境と施設設備もありますしお金があります。この、人と物をいかに整えるのかということが問われます。これは、一言でいうと地域社会の大切にしたいものをいかに文化の力、芸術の力でそれに磨きをかけてさらにその価値を高める、つまり企画して人と物を全て整備していくというプロデュース力、企画してプロデュースする。企画して制作するとも言いますが、この観点がないと地域展開、地域にでは非常に難しいという、自らやってそう感じております。すべてを移行することはほぼ難しいと思いますので、私はいつもビジョンにも語っているのですが、すべてを部活動という枠の中で何もかも全部包括するのではなくて、地域に行けば習いごとみたいな書くこともありますし、また古くからすごく熱心に活動している文化芸術団体さんもいらっしゃいます。そういう団体さんやまた子どもたちの居場所づくりをやっている NPO 団体、フリースペースみたいな形とかアフタースクールとか、いろんな活動があります。あと週末にやっています自治体とかの文化振興団体が行っているようなワークショップとか様々な新しい体験ができるようないろいろな場所が子どもたちの受け皿になるといいのではないかなと。その中の 1 つが地域に展開され、部活動でまた段階はまだいきなり変わることはありませんので、学校にも残れるものは残っていきながらという形がしばらく続いていくのではないだろうかと捉えております。長くなってすみませんが、やはり子供たちのニーズってい

うものをすごく大事に考える必要があると思います。子供たちのこれから 2030 年 40 年に社会の中心になって生きていく、活躍する子どもたちのニーズがどこにあるのか、これをぜひ私はご要望したいのですが、小学校の低学年中学年とか今中学校にある部活から何をやりたいですかというニーズじゃなくて、様々なジャンルから何をしたいのかというニーズを 1 回丹念に調査されたらいいのではないかと思います。それと、これもいきなりそうなるわけではないと思うのですが、学習指導要領を担う指導もありますので、その時にもまた触れられればと思うのですが、経済的な理由でとか、あとは地域だと移動手段、親御さんの送迎が出来る出来ないもあります。先ほど熊谷委員もおっしゃいましたが皆等しくというのはなかなか難しいと思うのです。経済的にもあと移動手段もという意味でいえば部活動のように異なる学年が一緒になって活動するという意味でいいますと、私が子供の頃にあった教育課程の中の特別活動クラブ活動というものがもう一回見直されてもいいのではないかなと思います。それによって経済的な格差とかいろいろな学年が一緒になってやるとか、自分たちで作り上げていく活動とかというのは教育課程内のクラブ活動でそれができるわけですからそちらに舵を切りつつ、あとは学校に残るものが残りつつ地域でも様々な受け皿ができるという形が私は良いのではないだろうかと今現在思っております。やはり子どもたちのニーズにふさわしく子どもたちが自主、実践、主体者になって自らが作り上げて、そしてそれを発信していくという取り組みをできるような未来を見据えた形が良いのではないだろうかと、私は実際にやってみて今そのように感じております。すみません長くなりました。またそれぞれの議題のところで触れさせていただきます。宜しくお願いします。

（北山座長）
ありがとうございます。私、割と近所の静岡市に住んでおります関係上、掛川市の地域の文化活動や学校についてよく存じ上げておりますが、とりわけ昔から学校文化と地域文化とを大切に結びつけようとしておられる地域での齊藤委員のご活動につきまして、私の手元にありますが、皆様のお手元にも綴じられているかと思います。WEB ページでも齊藤委員のされている具体的な活動についてのご説明がありますので、これから検討を進める中で具体的なご経験に基づいたご意見を頂戴できればなというふうに思っております。今後の調査のことについてのお話でありますが、これはご質問かなと思うのですけれど、今の時点ですべてお答えできないかもしれないですが、何か事務局の方からお言葉いただけますでしょうか。

（事務局）
ご提言ありがとうございます。調査はちょっと何がどのようにできるか、特に子供たちに対するということになりますと、様々難しい面がございますので出来るかどうかというのは今の時点ではもちろんわかりませんが、何らかその意向調査みたいなことが必要であれば考えていきたいというふうに思っております。現時点では考えておりません。

（北山座長）
ありがとうございます。必要な調査あるいはデータについては、具体的な内容を把握しながら進めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。それでは、座長代理をお願いしました齊藤忠彦委員、改めてご意見ご感想も含めてお話しいただければと思います。お願いします。

（齊藤座長代理）
はい。改めまして信州大学の齊藤と申します。よろしくお願い致します。私、もともと中学校の教員を長くやっておりまして吹奏楽部を十数年顧問で担当させていただきました。子供たちと打ち込んだ時を思い返すと教育の場面でのとても大切な時間だったなあと感じております。現在は教員養成の方で勤務しておりまして吹奏楽等の指導法等も担当したこともありました。先ほどの大坪委員の話と重なるのですが、「なんで音楽の教員を目指したいのですか」というふうに教員養成の学生に聞いたり、また推薦入試の面接の時も聞くのですけれど、その時に「吹奏楽部の顧問の先生になりたい」と答える人が多くいます。「音楽の授業をやりたい」という言葉が出てこなくて、本末転倒だなと感じる部分と、これほどまでに日本の吹奏楽と合唱とか文化に関わる大きな力が結集されてきているこれまでの歴史というのかな、そういうものはやはり大事にしなければいけない部分もあるのかなと感じております。特に吹奏楽も合唱も音楽関係ですけれど世界に誇るレベルであると言われているので、ある意味でここに至るまでの大きな歴史を良い形で維持できる、そういうことも大切なのかなと思っております。私はこの段階から参加させていただいておりますので不勉強なところが多いのですけれども、この文化部活動の地域移行に関するというようにタイトルがそういう方向で進んでいますので、例えばこれを子供たちとか現場の先生とか目にすると地域移行になっちゃうんだみたいなことを思われる方も多いのではないかなと思います。先ほど石津谷さんから話がありましたように最終的に私たちはどこを目指していくのかというところを模索しながらにはなると思うのですが、ある程度ゴールというのかな、方向性というものをしっかりと持っていないと途中で見失ってしまうこともあるのではないかなということが心配です。最終的にどういう方向に持っていくのか、このタイトルで行くと地域移行になってしまうのですよね。でも先ほど日本型っていうお話をいただきましたので、日本型というモデルはどういうモデルなのだろうという事はある程度イメージしながら進まないといけないのかなと感じております。その中では具体的に、例えば地域移行もする、でもそれだけではとても受け皿としては十分とは言えない部分も出てくるかと思うので、今まで通りの学校での文化活動も残すのかとか、ハイブリッド形式で様々な選択肢があるという方向が日本型なのかとか、そういう方向性について少し検討していくことも必要かなと思っています。私自身もまだ十分に見えてないところもあるのですが、ぜひ皆様と一緒に論議ができたらと思います。どうぞよろしくお願いします。

（北山座長）
ありがとうございます。確かに地域移行という言葉、この会議の名前にもなっておりますけれども、この言葉が完全に一般の方達にご理解いただけていないというか、学校の先生方のご意見等を私も SNS で見ておりますと、働き方改革のためにも完全に地域に移行しなきゃいけないという方もいらっしゃれば、先ほどお話にも出ていたように、授業もしっかりやりながら部活動も自分の教育活動の中の重要な位置として活動していらっしゃる先生がいて、そしてそういった先生方に憧れて教員になろうとする若者もいる中で、学校と地域、そして働き方改革とか様々な事をバランスとりながら考えていかなければいけない重要な局面、重要というか難しい所にいるかなというふうに思います。また齊藤委員には教員養成の立場からご意見をいただければと思っております。よろしくお願いします。それでは続きまして野口委員お願いできますでしょうか。

（野口委員）
はい。中学校文化連盟、野口でございます。どうぞよろしくお願い致します。
私達の組織は運動系の子どもたちと同じように文化部の子どもたちにも光を当ててあげたいというところからスタートした団体でございます。先ほどの高文連の先生と同じように中文連という形で活動しております。全国の総合文化祭も実施しておりまして、今、富山の吉田先生もいらっしゃいますけれど2年前には富山大会という素晴らしい大会をやっていただきましてありがとうございました。そういう形で考えていきますと本当に文化部の子どもたちをどうしていけばいいのかということをすごく今考えています。方や中学校の現状の話はですね、例えばクラスのお子さんに濃厚接触者が出た、そのクラスを今学級閉鎖にした。全員に検査キットを全家庭に配布する、その配布するのはいったい誰がやるのか。夜7時8時まで教員がやっています。それも若い先生たちのボランティアですね。お子さんがいる先生は帰らなくてはいけない。そうするといつも一部の先生たちが「じゃあ、やりますよ」ということで抱えている。現場は本当に子どものために良かれと思って、でも学校は何もかも確かに抱え過ぎているというのは感じます。この部活動地域移行、なるほど私は、それは国の考え方としてありだと思います。何もかも抱えている。じゃあその部分の子供たちの文化活動をどうすればいいのかなというのをここでご一緒に考えていきたいというふうに思います。例えば、私は演劇部の指導していたのですが、クラスの中で全くお話ができない不登校気味のお子さんも演劇部に来るとなぜかイキイキと堂々と活動してくれて、その子のその素晴らしさというのはやはり演劇部の顧問だから分かるという部分は確かにあるのです。そういう子をどういうふうにして見つけていくのだろう。例えば地域に演劇クラブを作って演劇の指導が得意な先生が両方に関わってそういう子どもたちを集めて指導する。これは、私はできると思うのです。また吹奏楽部については活動、音が出ますから、やはり学校の音楽室の方がいいのかな、楽器を持って地域の活動場所まで行って練習をして音が出るのをどうするの。その間の楽器を運ぶ時間はとか、いろいろな細かいことはもういっぱい出てきて、じゃあこうすればいいのではないのかという案は確かにすぐには出ないと思うのですが、でも少しずつやはり地域に文化部の活動移行をしていくという方向を模索していくということは、私はいいなと思っている一人です。どうぞ先生方、教えてくださいませ。今後ともよろしくお願い致します。

（北山座長）
ありがとうございます。中学校の文化部活動、高校もですけれど様々な種類のものがあります。やはりなんと言っても子どもが主役でありまして、その中で改革を進めなければいけないということになるかと思います。文化部のあり方というのは、学校において行われていて、それが地域とどのように関わるかということでいけば、スポーツ関係、文化部だけじゃなくて運動部との関係も、学校としてみれば一つのものですし、それぞれの特徴を踏まえながら文化部活動の地域移行というものを我々は考えていかなければいけないかなというふうにも思いました。ありがとうございます。それでは、続きまして長谷川委員お願いできますでしょうか。

（長谷川委員）
全日本合唱連盟の副理事長しております長谷川冴子と申します。どうぞよろしくお願い致します。もう

既にそれぞれの立場でいろいろなご意見を伺って腑に落ちるというか納得させていただいているところが大いにございます。私は今回初めてこの会に参加しておりますので新参者ですのでちょっとわからないことを言うのかも知れません。そしてまたあまり意見がまとまっているというものでもございません。全日本合唱連盟というところは、だいたい74年前に発足しました。戦前もありましたのですけれど本当にこの形で全国統一になったのは74年前なのですね。その間合唱に特記して先生方の育成も、それから歌い手たちの育成もそしてコンクールという場を設けてこれの育成にあたってきて本当にコロナ前までは大いに、なんていうのでしょうか、活躍をみなさんにさせていただける場だったと思います。コロナになってからエントリー数が中高合わせて約195団体位減りました。ですけれども20年度はできませんでしたけれど21年度は全国大会コンクールを開催することもできまして、今や小学校、中学校、高等学校それから大学ユース、職場、一般というように本当に小さな子供たちからシルバー、お母さんたちまで抱えている大事な文化の団体だと思っています。今回のこのお話というのはやはり理事会というか、こういうことが文科省を通して文化庁で発表になりましたという時にかなり学校の先生方が私どもの組織には多いので大変ショックというのかな、これからじゃあどうやってこの文化を、またここまで構築してきたものをまた繋げてくるのかというのはもう頭からショッキングな話題だったと思います。確かにその通りなのですけれども、そうですね、しかしながらこのなんていうのでしょうか、私はお歌の方に特記しているわけですけれども、明治になってから明治何年なのか分かりませんけれども尋常小学校の小学唱歌っていうのができたわけですよね。それが本当に素晴らしい曲が「白地に赤く」から「富士山」から「ふるさと」からすべてそこに網羅されている日本の大切な音楽。それによってそのなんていうのですか、大正までではなくてあの江戸時代まではもうちょっと違った日本音楽だったのですけれど、トナリティーっていうものにだんだん変わっていくということで大きな改革になったのではないかと思います。今や私たちはドレミファソに特記したそのトナリティーの中で音楽教育がいっているのですけれど、その明治時代と同じようなこの改革の一部なのかなと今感じています。ですからとても大事な曲がり角なのでないかな。ですから皆さん段階的なっていう言葉がここにございましたので、やはりすごく段階を踏まえないといけないのではないかなというのが私の考え方です。その地域の活動というのには受け皿を本当にどうするかという大きな問題がありますし、違いが大事とおっしゃった方もいたように私もカオスの中でこの文化をどうやって作っていくかということを願っております。以上です。

（北山座長）
ありがとうございます。合唱の活動というのは、吹奏楽もそうですけど、歴史的にも古くから学校と地域を結ぶ役割をもっておりましたし、合唱連盟で活動されている中でもその地域の大人のグループそして子供が入った地域のグループというものも沢山あって、学校だけではない観点からいろいろご意見が伺えるかと思います。まさに日本の合唱活動というのは、日本人の心のありようまで影響する非常に大きな役割を果たしてこられたかなと思います。やはり地域の受け皿ということでいけばそれだけのご経験がある連盟ですので、我々全体が文化活動としての参考にさせていただければなと思います。お話の中にも段階をということをおっしゃっていただきました。石津谷委員のお言葉にもありましたけど、慎重に段階的に、そして未来を、ちゃんとゴールを見据えながらですね、着実にやっていければいいなというふうにお話を伺いながら考えさせていただきました。ありがとうございます。名簿順でいきますと、冨士道委員は今日、ご欠席ですね。それでは村田委員お願いできますでしょうか。

（村田委員）
兵庫県教育委員会の村田と申します。どうぞよろしくお願い致します。今回、多分行政の立場として私どもが入っているのは、文化庁のこの令和５年度以降の地域移行に向けた調査研究というところで兵庫県の方でも今年度調査を始めたところです。その実態の話の中で今後の参考になればなと感じています。実際の調査研究の様子をご紹介しますと、本当に令和５年度からできるのかというのが正直なところです。委員の皆さんの中からもあったように、やはり段階的という言葉が絶対必要ではないかと感じています。もう一つはやはり地域にすべて移行していくのではなく教員との関わりを本当にどうしていくのか、それが先ほど出ていた日本型モデルという形になるのかなと思いますので、そういった意味では現場の意見を参考にしていただきながら日本らしさというものを出していくことができればなと感じています。調査研究の中でも兵庫県は広うございまして郡部もあれば都市部もあって、今年調査をするにあたっては郡部のところからスタートしました。そこではやはり地域人材という方もいらっしゃらないという課題の中で、顧問であったり教員それから保護者、子どもたちのアンケートをとって実態を把握しながら研究を進めてきました。その中で見えてきた視点を全部で 7 つほど今の時点でまとめたところなのですが、第一義にはやはり教員の働き方改革というのがありますので、業務改善をどのように進められるのか等、先生方の部活に対する意識改革というのが重要ではないかなという意見が出ています。
2 つに地域指導者の確保、視点３としては活動場所の確保、視点 4 としては教員以外の大会等への引率、主に吹奏楽について研究をしていますので、そういった意見が出ています。また地域指導者との連携をどうするのかといったところや、地域指導者との研修の実施、それから最後には費用負担のあり方というところで今検討を進めています。こういった現状も参考にしていただきながら日本型モデルというのをこの委員会の中で提言することができればと思います。今後も勉強させていただきながら議論に参加させていただきたいと思いますのでどうぞよろしくお願い致します。

（北山座長）
ありがとうございます。これまでにもたくさんの情報をご提供いただいておりますけれど、今後この検討会議を進める中で具体的な行政的な立場からのご意見等を伺いながら、現実を踏まえて議論を進めていければなというふうに思っておりますので、よろしくお願い致します。それでは吉田委員、オンラインでご参加いただいているかと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

（吉田委員）
はい。富山県教育委員会の吉田と申します。教育委員会という立場としてご発言させていただければと思っておりますが、なかなか今の兵庫県さんと同じように本県でも実践研究しております。そういった面から色々とお話しできればというふうに思っております。まず、私の方からは学校において先ほどもちょっとありましたけれど、運動部、文化部同じ部活動という取り組みで行っております。運動部と文化部が同じ方向を向いて方針というものが必要になってくるかと思います。スポーツ庁さんの方が先に検討会議も開いていらっしゃるということで、今回文化庁さんの方も開いていただいた事、本当にありがたく思っております。まず、そういった上でこの後具体的な検討項目についてこの後の会議の方で入っていくことになると思いますけれど、まず 3 つほど大きな課題があるかなというふうに思っております。

先ほども少し委員さんのほうからありましたけれど学校の部活動、こちらのほうは技術等の習得だけではなくて人間形成あるいは育成の場として捉えられてきております。この後、地域移行ということになってもそういったような観点が重要になってくるではないかなというふうに思っております。また、保護者の方の経済的な負担が増加するのではないかという懸念もあります。特に先ほども説明にもありましたが経済的に厳しい生徒が地域部活動に参加できるような方策等を検討していく必要があるのではないかなというふうに思っております。このことについては保護者、PTA の方からも心配の声を聞いているところでございます。また大会運営、こちらの方は学校対抗という形で今やっているものが多いわけですから、こういったところも検討する必要があるのではないかなというふうに考えております。本県の実践研究、一つの町の方で行っておりますが簡単に概要とちょっと今のところ挙がっている課題について少しだけお話しをさせていただきます。こちらの方は当県の郡部の方で一つの町が部活動コミュニティクラブというものを設立しまして、運動部、文化部それぞれをまとめて実行委員会等を開きまして指導者の派遣等を行っております。そこで見えてきた課題ですけれどやはり一つはやはり施設の利用、こちらのほう地域の文化施設のほうへはやはりこちら吹奏楽部がやっているわけですけれど、楽器の運搬等は非常に難しいということで学校での活動になると。そうすると体育館あるいはグラウンドとは違って校舎内でも使用するということでそういった上でやはり教員が土曜日あるいは日曜日どうしてもやはりその施設管理という上で勤務しなくてはいけなくなっているという点が今問題になっているということです。やはり後は地域指導者、人材の確保等、やはり郡部ですので地域指導者が少ないと。特に吹奏楽部指導者は高度の知識、技術等が必要になってきますのでそういった方がなかなかいらっしゃらないということがございます。またその謝金というかそういった面においてもやはり専門的な方ということで受益者負担が多くなる場合もこのあと懸念されるかなと思っています。そういった上で生徒にとっては非常にニーズが高い技術を持った専門家、そういった熱意のある先生方も携わっていただく。そういったようなことも必要なのかなと今後、検討していく必要があるのかなというふうに思っております。富山県の方では地域部活動のあり方検討委員会、これは運動部、文化部合わせて合同で行っておりますが各市町村からはより文化部の課題について情報を共有したいという要望が多く出ております。そのため、このあと文化部の地域移行に関しても各市町村の課題についていろいろ聞き取り調査を行う予定としております。細かい点にもなりましたけれど私からは以上でございます。

（北山座長）

ありがとうございます。既に実践されておられる生涯学習としての地域の活動、そしてその学校との関わりを課題としてお話しいただきまして、一つは学校の施設を使ううえでの学校の負担、あるいは学校とのやり取り、子供たちの立場からの使いやすさ、言ってみればその指導者のあり方とかいうことも課題としてお話しいただきました。今後の具体策を詰めていく中でも、学校と地域がどのように関わっていくかということが非常に難しいことで、かといってこれをこの機会に、何て言いますかね、今まで培ってきた地域文化あるいは学校文化がそれぞれ分離するのではなくて、むしろシナジー効果によって地域と学校がより強く結びついて、学校教育は働き方改革とともに先生方の授業研究の時間も十分保証されながら運営され、そして地域は学校と結びつくことによって教員と連携することによって、あるいは子供たちが有意義な時間を過ごすためにも学校と地域はどのように関わっていくか。ですから、単に移行するというだけではなくて、それは当然ベースに働き方改革があるわけですけれど、主体は子どもであ

ってその子供たちの為に我々はどのような関係を作っていくか。教員の働き方を提案することもそうした環境の一つでありますし、重要な改革のポイントかなというふうに思っているわけです。これからいわゆるコロナ後の急速な社会の回復、学校教育の回復という、災いの後かもしれませんけれどこれを転じて、学校教育、地域文化そして一人一人の先生方の働き方、そういうものがより改善されて、子供たちの楽しい放課後に向けて私共もできる限りお手伝いできるような形にしていきたいなというふうに思っているわけであります。私もちょこちょこ話しをさせていただきましたけれど、皆様からお話しいただいた中で、まだこれは言い足りなかった、あるいはちょっと質問しそびれたみたいなことがありましたら、また追加でお手を挙げてご発言いただければと思いますがいかがでしょうか。あるいは事務局のほうからも、ご発言いただいたことの中で事務局として付け加えていただけるような事とかありましたらご発言ください。いかがでしょう、最初のほうにご発言いただいた方にはちょっと言い忘れたかな、言いそびれたかなというようなことがおありかもしれないですけど。
はいどうぞ。齊藤委員。

（齊藤勇委員）
すいません。一つ付け加えさせていただければと思うのですが、スケジュールの方で 7 月に提言をまとめられるということでその提言の中に盛り込まれていったらどうかと思われるのが、まだ未来の見通しで結構なのですけれど、これから時代がどのように変わって、特にテクノロジーの発展がもう目覚ましいものがありまして、これは今部活動がすばらしいという熱心にご活躍の先生方、あと私も部活動で、部活動が人生で小中学校高校大学とやってきましたので、そういう世代の皆様が生きていた時代と、活躍した時代ともう大きく変わってくる事がいろいろな意味で予測されておりまして、まさにこの未来のテクノロジーをいかにうまく活用してこの文化芸術との触れ合いやまた地域や時間や空間を超越して何か素晴らしい体験ができるかとか、また特に合唱連盟の長谷川先生もおっしゃっていましたが、あの昔から継承してきた本当に素晴らしい文化、日本が誇れる文化をいかに残していくのかという点において一言だけ簡単にお話しできればと思うのは、バーチャル空間の中に全く劣化しない形での素晴らしいこのデジタル空間に、そういう保存していく技術というか残していく技術、またそれを今生きている私達の次元に昔生きていた人たちがその中にいて、あたかも交流できるかのような、いわゆる亡くなった人とも一緒に話していけるような技術とか、これはもうすぐそこまで来ているという話です。そういうことを怖がる部分もあるかと思うのですが、逆に考えるととても良い面もあると思うのです。今まで昔の時代は何も残せなかったので本当に口伝でとか実際体で継承していくしかなかったと思うのですけれど、それが今や残せる時代が来る。そのためこれからの、特に 20 代 30 代 40 代でそういった技術に対してもより積極的で抵抗がないというか前向きな皆様がそういった技術もうまく活用しながらこれまでの素晴らしいものを生かしつつ、というのは。なんか地域移行というと学校の部活動がどんどんなくなって、さっきも言いましたようにすごいショックを受けられる先生方とか、なんだったのかと思われる先生方とか、関係者の方たくさんいらっしゃると思います。だから、なんかそういうふうになくなってしまうんだみたいな感じになるとすごい後ろ向きになって、ですので新しい技術を生かしつつ、逆に 20 代 30 代 40 代のなかなか学校の先生にもなり手が少ないというお話もありますが、そういう皆様も前向きに捉えていけるような提言もこの未来の見通しとして盛り込めたらそういった方向も視野入れる程度でもいいと思うのですけれど、それはちょっとご提案申し上げたいなと思います。とにかく後ろ向きにならないで

あの素晴らしい文化を継承しつつテクノロジーも生かした、時間も空間も超越しみんなでやれるような、そういったことも必要ではないだろうかというふうに考えます。すいません、それはいい忘れてしまいますので付け加えさせていただきました。

（北山座長）
ありがとうございました。そういうテクノロジーの利用というのも今後の課題になっていくと思います。なにしろ新しいことを始めるにあたっては何か形を根本的に変えなければかえって複雑化、多忙化することになりますので、ご提案いただいたようなテクノロジーの利用というのは今後の重要な課題になるかなというふうに思っています。斎藤委員のご提案に関しまして、それぞれのご専門の立場から何かご発言いただけることはありますでしょうか。例えば石津谷委員、吹連の方で、私も吹奏楽の立場の人間でもあります関係上、コンクールのここのところの状況で、活動の場にコロナのために来られない子供たちのための講習ですとか、あるいはコンクールそのものが録音録画でやられていたりとか様々な工夫をされているかと思うのですけれど、今後の見通し等も含めまして何かご意見いただけますでしょうか。

（石津谷委員）
はい。今、座長がおっしゃったとおりでございます。来月、アンサンブルの全国大会がございますが、オミクロン株により急激に感染者が拡大したために、多くの県大会もしくは支部大会で、我々はデータ審査と呼んでいますが、録音審査という形での開催になってしまいましたが代表も無事に出揃いました。それでも現場から聞こえてくる声は、どんな形でも子供たちが発表する場を与えて欲しいとのことだったので、ご指導される先生方や保護者の方々にすごく喜ばれたんですね。保護者の中に「なんでコロナなのに活動なんてやっているんだ。」っていう人がいるみたいなことを言われるんですけれど、それは実を言うと部外者の方が発言されているようで、お子さんが音楽活動をしている方達っていうのは非常に前向きで、むしろ２年前ですが、全国アンコンを中止した時のクレームの電話は凄かったです。「なんでやらないんだ」「子供たちは頑張っているんだ」「大人の都合でやめるのか」とか。でも「いや、でも命が大切ですよ」とは言ったんですけどね。
だから子供たちのそういう活動の成果をなんとか活かしてあげたい。だから昨年の秋のコンクール、マーチングの全国大会は入場者を関係者だけとか、人数を制限して実施しました。その代わり、先程の ICT の話ですが、大会ではライブ配信を導入しまして、その配信がかなり好評でして、全国で多くの方々に同時進行で音や映像を流して楽しんでいただけました。ですから今後、もう少しそういうことにも力を入れていきたいな、と思っています。それとちょっと発言しようかなぁ、と思っていたのですが、いいですか？すみません長くなって。

（北山座長）
どうぞ。

（石津谷委員）
先程、教員志望の学生が部活ばっかり目指して、みたいな話があったのですが。実を言うと私、初任が小学校でして、その次に中学校に転勤しまして、その後高校に行ったんですね。一応３校種やりました。

高校で今教えていると、やはり将来のことの相談を受けるのですが、教師になりたいという子供たちが本校では意外に多いですね。理由を聞くとうちの部の子達は吹奏楽の指導者になりたいって言ってきます。ただその時に言うのは「教師は授業が第一、で２番目はなんだと思う？」と聞くんですね。すると「部活」って言うから「ふざけんな。２番目は生徒指導だ。生徒指導のできない教員は授業も部活指導もちゃんとできないからこれはダメだ。」「３番目はなんだと思う？」「３番目は委員会活動、給食指導、清掃指導。そういうことがしっかりできるようになってから初めて４番目で部活指導を頑張れ。その心構えでやれ。」と言ってます。それでも多くの子達が教師を目指して頑張ってくれます。で実を言うと各委員の先生方には失礼なんですけど正直に言います。私は吹奏楽部の顧問になりたいから教師をやりました。はい、でも勘違いをしないでいただきたいのは、だから授業を適当にやろうとは思いませんでした。むしろ部活をやりたいから平日の授業であったり、いろいろな活動を頑張りました。もうとにかく私の時代は校内暴力が吹き荒れていた時で、私が勤務した学校もそういうところだったんですが、物が壊されたりとか、もういろんなことが起きましたね。もうほんと毎日が大変で退勤時間が夜 10 時、11 時になったり、結局夜中まで居て学校に泊まったなんてこともありました。でもそれを我慢できたのは部活動をやりたいからで、そのために教師として当たり前のことをやって、そして土日だけでも音楽に親しみたい、子供たちと音楽を作り上げたいみたいな思いが強かったです。今若い人たちの中で教員希望者が減っているって、その理由にブラック面ばかりが出てきていますが、部活指導をやりたいので、やるべきことをしっかりやった上で勤務が少々きつくても頑張りたいと思っている子達もいるので、そういう子達の思いを大切にしてあげないと、本当に教師を希望するやる気のある若い子達がいなくなってしまうのではないかそれを心配しています。やはり今回の改革の原点は、主人公は子供たちだと思うんですけど、それを支えていくのは基本ベースは教員かなって。そこに地域の人達の協力を入れるというふうにしていかないと。教師が何にもやらないで地域丸投げとなったらたぶん失敗してしまうような不安を感じているんですね。だからそういうことも含めて、しっかり人を育成し、この制度をなんとかうまく軌道に載せていかなければならないと思っております。すみません。長々と自分のことまで言って申し訳ありません。

（北山座長）

ありがとうございます。実は私 2016 年から 17 年にかけて行われました国立大学教員国立の教員養成大学学部大学院附属学校改革に関する有識者会議というものにも参加しておりまして、現在の部活や授業が人材養成、教師志望の若者の教育にどのようにあるべきか、そしてそのモチベーションをどのように保っていくのか、学校の環境は教員養成学部の環境はどのようにならなければいけないのかとかいうことも深く考えてまいりました。おっしゃる通り、まず私たちが理解しなければいけないのは、現場で働いておられる先生方がどのような気持ちで努力されておられるか、そして何よりも、前にも申し上げましたけれど、先生方の存在というのは子どもの環境の重要な部分であります。その部活をたんに学校から地域に移すというだけではなくて、こういう移行の仕方があるのかということを子供たちを中心にしながら学校環境を考えていければいいのかなというふうに思っております。そういう意味でいきますと、今のコロナ禍の時代におきましては、その配信を利用した学校の活動を保護者の方に観ていただいたりですね、あるいはその社会の活動というものも配信されますので、子供たちもそれを見ることによってそれぞれの理解が高まることにもなりますし、むしろ社会が学校を理解する、そして子供たちはこうした文化活動の社会でのありようを見ることによって、今の自分達の学びがどのように将来に向かうのか

ということを考えるきっかけになるということです。非常に細かい課題をたくさん抱えているのは私もよく存じ上げておりますが、ぜひ前向きな方向で、この文化部の地域移行ということを建設的に進めていければというふうに思っております。そろそろ時間も限られてまいりましたけども、いかがでしょう、他にも何か言い足りなかった方。あっ、はいどうぞ。

（熊谷委員）
変な例え話ですけど、今コロナに対応して医療機関がちょっともう無理だと。では自宅療養にしてくれとかホテルに缶詰めで凌いでくれとやっています。あれは医療関係をまず守るのが第一で背に腹は変えられないから患者のためにホテルに入れたり自宅に入れるのが良いことだとは思っていないのです。でも、世の中ある程度それを仕方ないと思って受け入れています。メカニズムを変えると先生たちはもうあの定額働かせ放題のブラックで教員の志願率も下がり続けて質がもう担保できないと、なんとか教員を守らなければいけないということで働き方改革がもう進んでいるわけです。でも一方で生徒の目線から質の良い活動を地域でも提供できる仕組みを作らなければいけないと、正直いうと反対の方向性だと思います。教員のコーディネーターとしての力量は高いので生徒と地域とをうまく結ぶあのコーディネート力はやはり教員にしかないのです。そういう意味では二つの相反する目標を示してしまって、でも我々教育者のマインドとしては生徒の立場からと言わざるを得ないです。でもそれをやっていると教員の働き方改革の路線からはどんどん外れていきます。多分、学校の先生はコーディネーター役やファシリテーター役を地域と生徒の間に挟まれて、権限はないけれど義務と責任だけがあると。今までは責任も権限もあったのです。自分の全部守備範囲ですから、とても追い詰められていくなと、すいません、私は頭の中だけのメカニズムではそうなっているので正直言うとコロナみたいに今はこれをとにかくやって、他についてはちょっとその夢は語らないでくれと。仕方ないのだと。学校の先生達が潰れちゃおしまいだから、なんとか守り抜かなければならないから土日だけでも開放してあげよう。だからあまり質の高いとかそれは地域に求めるというのをあまり声高に叫ぶと、いや建前としては必要です。でも正直言うとやはり二つの違う方向性を同時に追い求めるよりは、はっきり検証可能な、学校の先生は働きやすくなったとか心のバランスを失いにくくなったとか。うつ病の発症が減ったとか志願率があがったとか、ある程度検証可能な数字的なエビデンスを求められる。なんというか方向がいいのではないかと思っています。あ、すいません。以上です。

（北山座長）
ありがとうございます。おっしゃるとおりですよね。このようなその学校の先生方の働き方の大変さというのは、どんな難しいことでもその方たちがこなしてこられたという能力の高さ、むしろそれが裏目に出ているというところもありますね。ですから今回のプロジェクトにしてもこれが先生方をより追い詰める方向に行くのは本末転倒であります。おっしゃるように先生方の能力を活かしながら、しかしすべての問題が完全にとは言わないまでも緩和されて、より良い学校環境、社会環境ができるといいなというふうに思いながら聞かせいただきました。ありがとうございます。それでは大坪先生。

（大坪委員）
この場に音楽関係の方がたくさんいらっしゃるのですけれど、おそらく吹奏楽部にしても合唱部にして

も音楽の先生が顧問をなされていると思うのですけれど、美術の立場からしますと実は美術部の顧問をやっている美術の教師というのは少ないのです。ほとんどが、運動部関係に回される。ほとんどやったこともないスポーツの運動部顧問をやっているというのが美術の教師。その結果として一生懸命大学時代勉強し、単位を取り、採用試験をしっかり頑張って受けて、教員になりました。1 年間野球部を持たされました。もうやれません。1 年終わったあと退職します。というのが複数名出てきて、これは文部省のデータのある通り 1 年で辞めてしまう教員が増加しています。ですから我々の時代に私たちが部活をやっていたときにやっていたそのような、若い先生と今はもう質が変わってきているのだということは、充分理解しておくべきだろうと。それから先ほどご意見の中に地域を結ぶ役割としての教員というご意見がございましたけれど、私はそれをやっているとやはり教員の負担量は変わらないと。さっき掛川市のほうの実践で紹介ございましたようにやはりそこをプロデュースしていく、そういった人材も必要なのだと考えます。そこをやっぱりこれからどう育てていくかという事が必要になってきますし実際に指導する人材が少ないのも事実です。しかし、少ないからと言って、プロデュースすることを学校教育の範疇でやってしまうと地域のニーズをくみ取れなくなってしまう可能性があります。やはりプロデュースして全体を把握できるような人材が必要ではないかと思います。それから ICT の活用では我々はまだコロナ禍の中での状況を考えていますけど、この話はコロナ禍が終了したその先を見据えての議論をしなといけないと思っています。ただコロナ禍によってわれわれは ICT で様々な議論をしたり交流をする技術を身に付けましたから、それをうまく利用していくのは当然なのでしょうけど、ただ私は文化活動の本質は例えば美術で言うならば展覧会にあるではない、音楽で言わせていただくなら私は素人ですけれど演奏なさっているところが文化活動でしょうか。実は本質はその前にあるのではないですか。そこはなぜそこが本質かというと、人と人がそこで触れ合っているからだろうと思います。ですから当然 ICT 活用はしていくし、利用していきますけれど本質はやっぱり文化活動は人と人がそこで触れ合うところにあるというところを念頭においてその場をなんとか探していきたい。すべてがバーチャルでというのはやはり文化論の上においては問題が多いと私は思っています。以上です。

（北山座長）

ありがとうございます。人と人との触れ合いが文化活動であり、それがなんと言いますか、芸術の存在そのものかなというふうな気がいたしますね。確かに時代によって変わりますので、これから我々は自分の経験だけではなくて、今の若い人たちの考えというのをちゃんと受け入れながら将来を模索しなければいけないなというふうにお話しを伺いながら考えさせていただきました。教員の力があるからといって学校と地域のその中に教員を巻き込むとかえってその負担になるというのも事実でありまして、まさに別のもう一つの新たな方法として外部のそれを支える団体ですね、地域の団体。これが各地の文化振興財団であったり芸術関係の施設だったりするかと思いますけれど、そういうところとの関連をどのように作っていくかということがもう一つの鍵かなという気がします。いずれにしても難題をたくさん抱えておりますので、これから皆様方のご意見をうかがいながら、具体的に、そして確実に実行できる方法で、段階的にちゃんとゴールを見据えて議論いただければありがたいなというふうに思っております。いかがでしょう。だいたいもう時間にもなりましたし、またこれからのご意見をいただく機会もたくさんございますので、その時にまたお聞かせいただくとして、本日はこれで終了したいと思いますがいかがでしょうか。もし今どうしてもということがありましたら伺います。よろしいでしょうか。

それでは。　はいどうぞ。

（石津谷委員）
ちょっとこの資料が実は届いたのが昨日でして、じっくり読み込めないで今日来てしまって失礼な発言をしてしまったみたいなところがありまして。お忙しいのは十分認識しておりますが、資料がもしあるようでしたなら直前ではなくてもう少し前だときちんと読み込んでくることができるかなと思いましたので、それだけは今後の会議を進める上でお願い致します。

（北山座長）
貴重なご意見、ありがとうございます。事務局の方から何か。

（事務局）
はい。申し訳ございません。なかなか難しいところはあるのですが、努力して参りたいと思います。
本日はどうもありがとうございます。

（北山座長）
なお、本日の資料の多くは文化庁の WEB ページからダウンロードできるようにもなっておりますので、そちらもご利用いただければいいかなというふうに思います。それでは、本日予定しておりました議題はこれで全部終了いたしました。次回の開催日程ですが、３月２４日の木曜日 14 時から 16 時ということで予定しております。皆様方にもその日程のご都合の伺いなどもあったかと思います。特に問題が無くて事務局の方でそのように設定していただいたと思うのですが、３月２４日木曜日 14 時から 16 時ということで予定しております。よろしいでしょうか。それではよろしくお願い致します。
また何かご質問その日程のこと等でご連絡がありましたら事務局の方にお願いいたします。
それで本日はこれにて終了いたします。ありがとうございました。

（全員）
ありがとうございました。

以上